

広島文芸誌

鬼 SAKIGAKE

Vol. 1
2019

魁同人会



広島文芸誌

魁

2019
Vol. 1
魁同人会

創刊への想い

インターネットの普及で本が売れなくなっているそうです。私のような活字世代には淋しい限りです。この夫婦の同人誌『魁（さきがけ）』は、リトル・プレスとして少數出版をすると同時に『魁』のホームページで全部読めるようになっています。まずホームページで読んでみ

て、保存をして置こうと思われる方はご
購入下さい。

魁同人会 森昌之

令和元年 八月

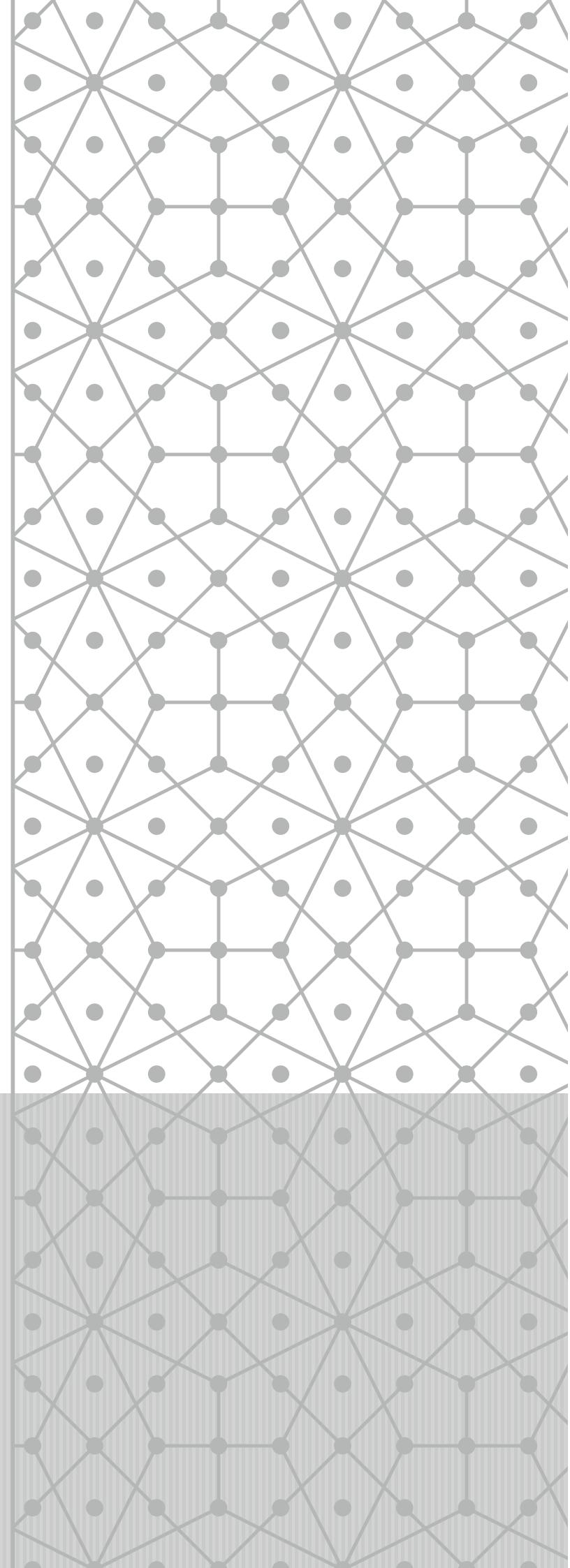


広島文芸誌 魁 SAKIGAKE

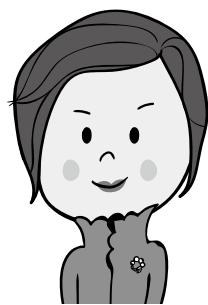
- 電子版閲覧サイト
<https://sakigake.website>

- 通信販売サイト「しおまち書房 ネット販売部」
<http://shiomachi.shop-pro.jp/>

I
短
歌



森ひなこ



短歌の同人に属して作歌をしています。社会保険労務士の勤務日数を減らしたので、短歌を作る時間は増えましたが、給料が減りました。昌之、もっと給料をくれ!!

悪性リンパ腫

平成三十年十月に

犬はわれにわれは犬にとたより来て十三年の歳月ながる

わが犬の病名悪性リンパ腫とふ診断されし十月十三日

十三の生日までは生きられるや余命一ヶ月と言はれしチョコラ



この犬に盲の母をり十五歳目耳失せど食欲のあり

老犬と病む犬つれて行く公園ゆらりゆらりと三つの影ふむ

真つ黒き便をたらりと排出すチヨコラの抱く病魔のごとし

犬二匹と老女のあるく公園の細道いつか落葉ばかり



落葉はティツシュのごとくうるみつつ夏の死骸を埋葬しゐる

足裏に湿つた落ち葉の音たてて今年かぎりのいのち踏みしむ

あたたかきほほゑみに似て落葉は命短き犬足を包む

落葉を鼻に付けては駆け抜けた 若かつたねえと犬にわれにも

落葉はわれに冷たし真夜目覚めはらりはらりと声たてず泣く

泣き終へばらんらんと目を見張りつつ犬の生きるを確かめてゐる



家族葬

叔母死すと十二月朔のシクラメン飾りしばかりの卓上の電話に

喪服着て朝のホームに佇めばわれは慎まし忍者のごとく

世の風の吹けるホームによろよろと昨夜^{よべ}の酒より這ひ出せぬ若者

シャツ脱ぎて頭に被り彼はいま宇宙を渡る旅人UFO

のびのびと通路に手足投げ出せば蛸になりたか^{じいうびと}自由人かれは

目覚めればきつと母国は別世界こがらしじんと身に沁みるべし

家族葬会ふ人みんな縁者にて思ひだせねどお久しうりと

母の兄の子のだれかれの ごちやごちやと他人同士の家族葬なり

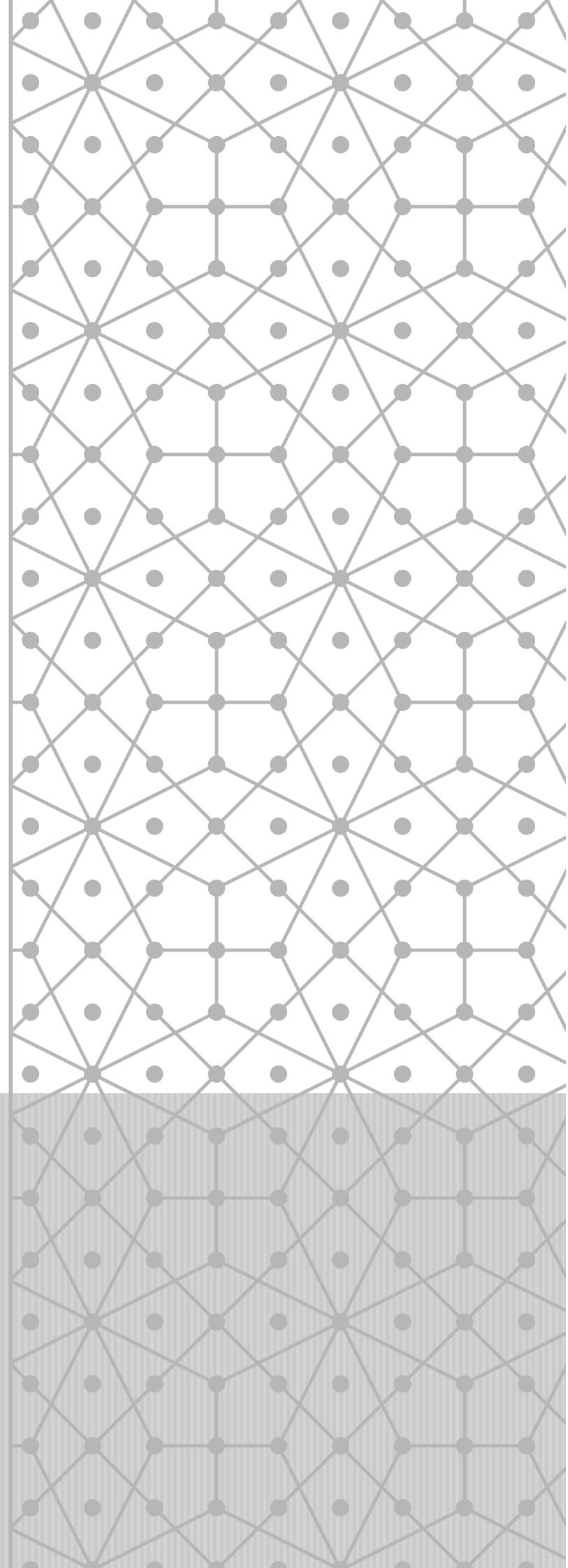
九十は十九歳とは異なりて斎場あふるる哀しみもなし

痛む足で夕べのホームに降りたてばふと思ひ出づ朝の若者

彼もわれもひと世の一瞬すれ違ひそしてすべてを忘れ果てゆく

爪先から現世に下る階段を転がるごとし 夕餉が迫る

II
小說



森 昌之



税理士で生計を立てながら小説を書いています。小説を書く時間がもつと欲しい!!

ノ
ー
・
ノ
ー
・
ボ
ー
イ

ヒロシマの青春



原爆死没者慰靈式並びに平和記念式
(昭和 38 年・広島市公文書館提供)

第一章 昭和三十八年八月一日

1

研が、原爆投下の日、昭和二十年八月六日に産まれたことには何の意味もなかつた。原爆によつて、父は即死し、母は自分で産んで間もなく死んだ。研には他の日に、例えば今日、昭和三十八年八月一日に生まれていれば当然備わつていた筈のものが何も備わつていなかつた。その日に生まれたばかりに自分は孤児になり、誰に頼ることも出来ない境遇で生きねばならなかつた。母の兄の伯父が自分を育ててくれたから何とか路頭に迷わなくて済んだ（畜生！何と言う人生だ）。だからその日に生まれたことは何にも良い事は無かつた。こんな悪いことは一日も早く忘れてしまうのに限る。だから研の中ではとうの昔にそれは思い出すのも忌まわしいことになつていた。何かで思い出すと悪夢でも見たように懸命に忘れようとした。『糞つたれ、お前なんかとつとと消え失せやがれ』と思いつく限りの悪態をついて。意味がないとはそういうことだつた。

ただ、やはり原爆だけは憎かつた。父も母もそれで死に、自分を一人ぼっちの身寄りの無い人間にしてしまつた原爆である。憎んでも憎み切れないほど憎たらしかつた。

2

その前日の夜、東京駅を出た夜行の特急列車が広島駅のホームに滑り込んだ。昼過ぎの閑散とした時間帯で、駅のホームの人影はまばらだつた。午前中に一雨あつて、それはまもなくやんだが、ホームのそこここに雨の濡れ跡

がしみのようになつて残つていた。中断を一気に取り返そうとするかのように、きつい日差しが戻つて來た。ホームの屋根の下の蔭になつた場所でもじりじりと暑かつた。吹き抜けのホームではあつたが、風の気配は全くなかった。轟音をたてて滑り込んできた列車に人がわつと集まつて来る。人影の無いように見えたホームのどこにこの人たちは潜んでいたのだろう。

人群とは、乗客に混じつてホームに降り立つた一人の背の高い男性を取り囲む。地元の新聞社の記者達によつて盛んにカメラのフラッシュがたかれる。男性は、日本原水協の安田理事長だつた。実は安田は今年の三月に理事長辞任を表明していた。焼津でのビキニデー全国集会での混乱が原因だつた。しかし、安田は原水協の創始者でもあり、他の適任者がいないこともあつて、辞任は留保されたままになつていた。

安田は五日から開催される原水爆禁止世界大会に出席するため広島にやつて來たのだ。
列車を降りた乗客達の中で、白髪をなびかせながら、瀟洒なスーツに身を包んだ英國紳士風の安田はひときわ目立つていた。

「予定通り世界大会は開催されますか」

「その積りではあるがね」

「何か奥歯に物の挟まつたような言い方ですね」

「うん、まあ、やはりその質問にはノーコメント。こちらは良くてもあちらがね」「あちらとは具体的に言うと」

「それもちよつと僕の口からはね」

「もつとはつきりしたコメントはいただけませんか」

「とにかく君達にはどこかで会見を用意するから」

安田と記者団はそんな会話を交わしていた。

日本原水協では、労働党や労連の主張する『すべての国の核実験に反対』の意見と、人民党の主張する『ソ連の核実験は米帝に対する防衛的行為であるから賛成』の意見が正面からぶつかり合っていた。その従来からの対立に加えて、何日か前に、米英ソ三国間で締結された『部分的核実験停止条約』に対する評価の相違があつた。労働党・労連はこの条約をこれまでの運動の一定の成果として評価していたが、人民党は近々核実験が予想されている中国を排除し、米英ソの核保有を固定化するものとして反対していた。労働党や労連にしろ、あるいは人民党にしろ、原水協の正式なメンバーではなかつた。しかし、いつの間にか彼等が跳梁跋扈して、原水協では彼等のいわゆる『三者会談』によらなければ何の事項も決まらなくなつていた。

列車から降りた乗客達は一様に日に焼けた顔をし、ラフな服装をしている。いずれも安田と同じ世界大会に出席する参加者の面々だつた。彼等は安田や新聞記者の一団を横目に見ながら通り過ぎて行く。その視線には高名な市民運動家を目にする興味が半分、混迷を極める原水禁運動の渦中にいる安田の心中を思いやる戸惑いが半分ずつあつた。

今井哲郎は、雑踏の中で、そんな安田を囮む記者の一群を見ていた。同じ列車で降りてくる筈の父を待つていたのだった。

安田と記者団のやり取りを聞きながら、哲郎は安田の大人の対応にしきりに感心していた。自分がもし将来、例えれば安田と同じ立場にたつたとして、新聞記者達に今の安田のような洗練された受け答えが出来るかどうかは疑問だつた。

とは言つても、哲郎が感心したのはほんの少しの間だつた。すぐに哲郎は自分の立場に立ち戻つた。呑気に感心

している場合では無かつた。安田と自分はまるで立場が違つていた。自分の立場は、安田達からは『あちら』と呼ばれ、世界大会を混乱させる張本人とみなされていた。

それに仮に将来、哲郎がそういう場面に遭遇することがあるとしても、それは自分達の革命が成功してから、つまり遠い先の話だつた。それに将来の仮定の空想なんて自分にまつたく似合わない話だつた。

『原水禁運動は大人に脱皮しなければならない。いつまでも市民運動に留まつてはいるべきではない。世界に通用する政治感覚を持つ必要がある』

いくら悪役扱いされても自分の立場に対する信念は揺るがなかつた。改めてそう思うと、哲郎は自分の中にまたいつもの力が漲つてくるのを感じた。

安田は記者達と一緒に階段の方へ歩いて行つた。駅の南口と北口を結ぶ連絡路が二階にあるのだ。その後に、取り残されたように一人の初老の男が立つていた。哲郎の父だつた。背が高く瘦身の哲郎と同じように父も瘦せていた。これまで父は安田達の一団の背後にいたのだ。どうして気が付かなかつたのだろう。哲郎は手を上げた。それに応える父は良く言えば学者風でいかにも影が薄かつた。

哲郎は父に近付いて行つた。もう何か月もこの父には会つていない。

「疲れた？ 夜行は大変だつたでしょう」

「うん少しね。疲れなかつたから」

父も原水禁世界大会に出席するため、東京からやつて来ていた。安田とは同じ大学に勤務していた。二人は同じ夜行に乗つて広島にやつて來たのだ。安田は市民運動家であつたが、父は古い人民党員で二人の政治的立場は違つていた。しかし、二人は中学、高校、大学の同級生で昔から仲が良かつた。

「安田さんは元気が良いね」

哲郎は父から鞄を受け取り、記者団に囲まれて階段を上る安田の後姿を見ながら言つた。

「昨夜彼は列車の中で夜遅くまで本を呼んでいたよ。僕なんか眠れないと困るんで睡眠薬を飲んで寝に就いたといふのに。彼は僕と同い年なんだよ。すごいバイタリティだな」

「薬を飲んでも眠れなかつた？」

哲郎は父に聞いた。父は普段から睡眠薬常飲者だつた。

「まあ、揺れもひどいしね。でもこれで新幹線が開通すれば東京大阪間が三時間に短縮されるというじゃないか。

そうなれば楽になるけどね」

来年には東京でオリンピックが開催される。東京を中心に日本列島は大改造成中だつた。東京と大阪を結ぶ新幹線と称する弾丸特急の工事が着々と進んでいた。

二人は改札口を通り駅前広場に出た。父は駅前のホテルに宿をとつていた。

「これから会議？」

「いや、今日は全国あちこちから参加者が集まつて来るからね。正式の会議は明日からだ。でも悠長にしてはおれない。明日予定の国際会議を開催するかどうかを決めなければならない。それが開けるかどうか分からぬ。安田さんは、今日は集まるる役員だけでも集まつて貰つてこの問題を検討しようと言つている。私は安田さんから召集のかかるまでとりあえずホテルで少しうもう。君の方は？」



広島駅前

(昭和 38 年・広島市公文書館提供)

「僕の方は夕方から小集会が入つてゐる」

「終わるのは？」

「多分九時頃」

人民党は今回の世界大会の主導権を握ることを至上命令としていた。その為に密命を帶びた若い党員達が何ヵ月も前から広島に潜入していた。哲郎もその一人だつた。哲郎達は昼と言わず夜と言わずオルグ活動に奮闘していた。今夜の小集会もそのオルグ活動の一環だつた。

「じゃ、終わつたらホテルに来なさい。久し振りに夕食でも一緒にとろう。道子さんからの手紙も預かつてあるし」道子の名前を聞くと途端に哲郎の胸は動悸を打ち始める。道子は哲郎の別居中の妻だつた。小学校の臨時の教師をしながら息子の徹を育てている。二年前、哲郎が家を出る時の道子との口論がまざまざと思い出される。

ホテルのロビーで父に鞄を渡した。父が受取る時、それまで小脇に挟んでいた文庫本を床に落とした。列車の中でも読んでいたのだろう。拾い上げた哲郎が表題を見ると、『ケインズ経済学入門』だつた。

3

仕事を始めてしばらくは眠りの延長のような時間が続く。旋盤は最初からピッチを上げて唸るのだが、身体と気持が機械の音と動きについていけない。しかし、一時間もすると、旋盤のリズムと人間のリズムがようやく合い始め、長い一日がこれから始まるという実感が沸き始める。研はこの浮き立つような瞬間が好きだつた。

「おい、研。明日車に入るぞ。クルマだよ、クルマ」

隣の旋盤を動かしているヤスがそう言いながら叫んでいる。人と旋盤が一体となり始めるこの時間になると、工

場の誰も軽口を叩きたくなる。どうせ仕事は暗くなるまで続く。ならば少し位は無駄口をききながら仕事をしたいというものだつた。

ヤスの本名はヤスヒコというらしいが、皆はヤス、ヤスと呼んでいた。研も皆に習つてヤスと呼んでいたが、どんな字を書くか知らなかつた。

ヤスは研の同僚で、研より一歳年上だつた。まだ若かつたが、腕の良い職工で、別の工場で働いていたのを伯父が引き抜いてきた。研もこのヤスに手取り足取り仕事を教えて貰つてゐる。ヤスは狐のような顔をした不良がかつた少年だつたが、研とは年齢も近く仲が良かつた。

ヤスは大の車好きでもあつた。自分の車が欲しくてせつせと貯金に励んでいた。研もヤスに連れられてあちこちのディーラーのショーウィンドーを見て歩いたことがある。どうやらヤスは念願のその車を手に入れることができたらしい。

「来たら絶対に見てくれよ。その後お前とドライブと行こう」

「ドライブ？」

「そうさ、新車で思い切り飛ばすのさ。ああ、お前とデイト、楽しいな」

ヤスは恋人にするように自分の腕を研の腕に絡ませてきた。ヤスは研と遊びたくて仕方ないのだ。研が通う定時制高校が夏休みに入ると、待つてましたとばかりにこのようにいろいろな遊びに誘つてきた。

この工場は研の伯父が経営していた。市内あちこちの大きな工場からいろいろな仕事を下請けしている。工場は景気が良かつた。特に元請の一つの自動車会社が売り出した軽自動車が飛ぶように売れている。たえず工員の募集をしていた。次々と新しい工員も入つて來た。二交代制をとつて一日中工場は稼働していた。それでもこなしきれ

ないほど仕事があつた。

『お前は定時制高校に通つてゐるからいつもは残業が出来ない。夏休み位こちらが言わなくとも残業をしろ』
定時制高校が夏休みに入ると伯父は研に言った。しかし研は残業などしたくなかった。研は大学に進学したかつた。研は三年生だったが、定時制高校は四年生制なので、受験は来年だった。でももうそろそろ受験勉強をしなければならなかつた。夏休みこそ受験勉強をする絶好の機会だつた。だが自分を育ててくれた伯父には逆らえない。それで、毎日一時間だけ残業をした。伯父は不服そうだつた。研はそれには構わず毎日いろいろ理由を並べては一時間の残業だけで工場から逃げ帰つた。

研が、今日の残業から逃げる理由をいろいろ考えながら旋盤に向かつてゐる時、伯父が一人の男を連れて來た。伯父が連れてきた男は、研には忘れようとしても忘れられない男だつた。男は北村というテレビ局のディレクターで、研は以前この北村の番組で取り上げられたことがあつた。

あれは研が中学三年生の時だつた。伯父のところに北村から取材の依頼があつた。北村は、原爆投下の日、昭和二十年八月六日に生まれた研の日々をドキュメンタリー番組にしたいのだと言つた。どこでどうして研の生年月日を知つたのだろう。伯父は喜んで承諾した。伯父はテレビ局の人間を偉い人間で、番組に取り上げられることを名誉なことだと思つていた。

去年、北村を最初に見た時、研はこの男を一目で嫌いになつた。北村は長い顔をして、黄と黒のチェックのシャツに、薄黄のブレザーを着ていた。こんな服装で現れた北村は埃と油にまみれた工場ではいかにも場違いだつた。研は断りたかつたが伯父が承諾したので仕方なく取材に応じた。取材は不愉快極まるものだつた。北村は横柄で質問は無遠慮だつた。研は中学生の子供ながら何度も北村の態度

にむつとした。何の権利があつて北村は自分や自分の父や母のことを傷口を抉るように聞くのだろう。こいつは自分がことを神様みたいに、何を聞いても良い人間だと思っているのだろうか。

撮影が済み、しばらくして放映された番組をみて研はびっくりした。そこにあるのは、原爆投下の日に生まれた少年のその後の哀れな境遇だった。

研は普段着で撮影に臨んだ。シャツのボタンが取れ、ズボンの膝が抜けかけていた。自分の金で買えないのだから、そんな服装で毎日を過ごしていた。途中から伯父の女房の君子がいくら何でもみすぼらし過ぎると、息子の次郎の服を仕立て直して着せてくれた。しかし、画面にはみすぼらしい服装の研しか映つていなかつた。

確かに自分は世間的には不幸な人間かもしけない。身寄りもなく伯父に育てられている少年でしかない。しかし、それは人の目に曝すようなものだろうか。研自身それまでその過去が人目に触れないようになつと沈黙のうちに隠してきた。清算できるものなら清算したい過去だった。

研は目をそむけた。それがまるつきりの嘘であつたらどんなに良かつただろうと思った。それは嘘ではなかつた。しかし何一つ本当のものは無かつた。それは全て予め北村の頭の中で組み立てられた少年像だつた。北村がそれを得意げに無神経に人の前に投げ出して白日のもとに曝している。

番組の最後には、『逆境にもめげずけなげに生きている彼が今後も素直にまっすぐに生きて欲しい』とナレーターがコメントした。何がけなげだ。何が素直にまつすぐだ。『お前達に何が分かる』研は思つた。

北村はこの番組で何かの賞を受賞した。その授賞式もそのテレビ局のニュースで放送された。北村は満面の笑みを湛えてトロフィーを抱えていた。研は自分が利用されたと思った。こいつは俺なんかどうでもいいのだ。俺はこいつの单なる素材に過ぎなかつたのだ。

その後しばらくは会う人会う人に声をかけられた。皆、あの番組に感動したと言つた。研は自分の中のこの怒り

は誰にも分かつて貰えないと思った。だから黙っていた。ただ北村は許せないと思った。北村を憎んだ。

あれから三年経過して、伯父と一緒に現れた北村は相変わらずだった。今度は赤いシャツに水色のブレザーをはおつていた。そんな服装が工場の中では場違いなのも同じだった。

伯父は北村を案内すると、事務所に帰つていった。伯父が去つた後、北村は長い顔を一撫ぜして笑いながら話し始めた。

「君、久し振りだなあ。僕を覚えているかい？」

忘れようとしても忘ることのできない顔だつた。

「あれから三年経つて、君は十八歳になるんだろう。その成長の様子を又番組にしたいんだ。もちろん協力してくれるよね」

相変わらず自己中心の口調だつた。

「僕は嫌だ、あんな番組には出たくない」

研は即座に断つた。

「どうして？ 賞まで貰つた番組をあんなとは」

「曝しものになるのは嫌なんだ」

「曝しもの？ それは聞き捨てならないなあ。僕は真実を伝えたいんだ。それが何かを暴露することになるとしても、そこは君、受け入れて貰わないと」

この男は三年前と何も変わつて無かつた。研は次第にいらいらとしてきた。

「それに、僕は工場で働いている。夜は定時制高校にも通つていてる。だから時間がない」

「でも伯父さんは取材の許可を貰っている。それに今は夜学は夏休みなんだろう」

「ああ言えばこう言いでなんと嫌な奴だろう。」

「伯父が何と言おうと関係ない。それに夏休みでも仕事が終わつたら勉強がある。それに：」研は口籠りながら思い切つて言つた。

「僕はあんたが嫌いなんだ。どうせ又表彰されたいんだろう。お前なんかに取材されたくない。帰つてくれ」

「僕を嫌い？ それは結構。僕の仕事は眞実を伝えることなんだ。その為に嫌われるのならそれは本望だね」研はもう我慢できなくなつた。三年間の怒りが一度にこみあげてくるのを覚えた。何としてもその自信満々な態度のこの男に一発喰らわしてやりたくなつてきた。

自然に側のスパナを手に取つていた。

「僕が断つているのが分からぬのか。なんならこれでその胡瓜みたいな顔を殴りつけてやろうか」

スパナを振り上げた研に北村はぎよつとした顔をした。研が本気そうなのを見ると二三歩後ずさつた。

「何だ、君は何をやらかす氣だ」

しばらく睨み合いを続けていた。しかし、今日はこれ以上交渉を続けても無理だと悟つたのだろう。

「今日は君のご機嫌が悪いようだ。また出直すよ。放送局の人間にあんまりそんな態度に出ない方が良いよ。後で吠え面をかくことになるからな」

そう捨て台詞を吐きながら、北村は工場を出て行つた。

「おい、研。大丈夫か」

いつの間にかヤスが研の傍に立つてゐる。ヤスも手にスパナを持つてゐた。

「あいつ、嫌な男だなあ。お前が向かつて行つたら俺も加勢してやろうと思つたんだ」

ヤスは呆然と突つ立たままの研の手からスパナを取りながら言った。

長い一日が終わった。研は今日もいやいやながら一時間の残業をした。しないと伯父の機嫌が悪かつたからだ。でも今日一日とても損をした気分だった。自転車で夕暮れの街をアパートに戻った。

研は今夜、小林のアパートで英語の勉強を見て貰うことになつていて。小林は研の通う定時制高校の英語の教師だつた。夏休みに入ると小林は大学進学志望の研の為特訓をしてくれていた。しかし、一方で小林は職場演劇にも取り組んでおり、その稽古が八時まであるので、それまで個人教授は出来なかつた。

劇は広島の職場劇団の合同公演で、原爆詩人峰信吉を主人公にした『川』を上演する予定だつた。上演の日は明後日三日で、小林達はその追込みの稽古の真っ最中だつた。

『ある小集会があるんだ。八時までそこに出席しないか』

研の時間の空きを知ると、小林はそう勧めた。研はその集会がどんなものか知らなかつた。小林を全面的に信頼している研は勧められるまま出席することにした。これまでも小林に勧められるままあちこちの集会に出席していた。小林は人民党員だという噂があつた。そんな噂があつても、研は気にしなかつた。人民党がどんなものか知らなかつたからだ。それにどうせ八時までの時間潰しだ、顔だけ出せば良いのだろう、研はそう簡単に考えていた。

夏の夕方、町はあたり一面血のような色に染まる。町全体がまるで窯の中に投げ入れられたようで、暑きがじりじりと地面を、建物を、並木を焦がす。風がぴたりとやむ。この町名物の夕凪のひとときだつた。

川べりにバラック造りの住宅群が立ち並ぶ。原爆で焼け出された人達がそこに住んでいる。原爆スラムと呼ばれる、その一角の一軒で小集会が開かれていた。

部屋には折畳式の机がいくつか並べてある。集会には十人ばかりの参加者がいた。いずれも仕事が終わって駆けつけてきた若い男女ばかりだった。

初参加の研は後ろの方の机の片隅に座っていた。残業の疲れを重く感じる。まだ十代の若い肉体とはいえ、一日の肉体労働の疲れが身体のあちこちに残っている。何だかとてもやけつぱちな気分になる。それに空腹だった。こんなことならパンでも口にしておけばよかつた。夕食はいつも勉強の後小林と一緒に食べている。それまではまだ何時間がある。そう思うと余計に空腹がこたえた。

部屋の壊れかけた扇風機が、きしむような音と共に生ぬるい風を送つて来る。部屋の隅に畳んだ布団の上にリュックサックがポツンと一つ置いてあった。これはこの部屋の住人の所有で、その置かれかたからこの部屋が住人の一時的な住まいであることを物語っていた。この部屋は住人の住居であると同時にアジトにもなっていた。この部屋で今夜のような小集会を開き、オルグの際ばらまくビラをガリ版印刷し、空いた隙間で住人が布団を敷いて寝た。

集会の講師は、この部屋の住人である今井という背の高い痩せた男だった。年の頃三十歳位、小林によると、東京大学を卒業しているという。卒業しても就職はせずに、学生時代からの延長で人民党の専従を続けているという。

今井は何ヵ月か前、東京から移つて来たばかりだった。今井だけではなく何人もの人民党員が広島に潜入していた。彼達は、あちこちで毎晩のようにこのような小集会を開いては、彼等の主張のプロパガンダに余念がなかつた。その目的はただ一つ、五日から開かれる原水禁世界大会で主導権を握ることだった。



「原爆スラム」と呼ばれた住宅群
(昭和43年・広島市公文書館提供)

研はここに来るまで今井がどんな男か興味があつた。小林の言う東大卒の男がどんな顔をし、どんな口のきき方をするのか、この目で見てみたかった。研は大学進学志望だったが、実はその大学は東大だった。広島市内外に点在する地方大学ではなかつた。自分の大学進学志望は何人かを除いてまだ誰にも話していなかつた。ましてや東大を受験するなど誰に話せるだろう。

一同を前に今井は話し始めた。目の前の今井は確かに頭の良さそうな顔をしていた。しかし一見して研は自分とこの男は相性が合わないことを直感した。

「…ということで、米帝は核を侵略目的に使用しようとしています。米帝の狙いは世界中を米帝の植民地にしようというものです。そのためには原水爆を脅しに使います。言うことを聞かなければ原水爆をお前の国に落すぞ、と脅迫して相手の国を服従させるのです。でも中国は違います。中国はどこの国も侵略しません。しかし、米帝に屈服することは断じて出来ません。だから中国も原水爆を持とうとするのです。持つたからと言つて全然危険ではありません。なぜなら米帝とはその目的が違うからです」

今井は話の中でこのフレーズを何回も繰り返した。これこそが彼の主張点であつたのだろう。

今井の話が始まると直ぐに研は眠くなつた。しかし、実際には眠れなかつた。今井の同じフレーズが耳や頭を突き刺すからだつた。そのうち今井の主張が聞き捨てならなくなつた。研はたまらず声を上げた。

「僕は今井さんと考えが違います」

「ほう、どう違うんだね」

今井は無表情に答えた。その表情を見た時、自分のこの男を見た時の違和感がこの表情にあると思つた。

「僕はどんな国の核実験にも反対です」

「ほう、なぜだね」

「僕の父は原爆で死にました。母は僕を産んで間もなく死にました。理由はそれだけです」

「だから？」

今井は冷静だった。それが研をかつとさせた。研は身体が熱くなるのを感じた。

「だから、どんな国であろうと原爆の使用には反対です」

「君のお父さんやお母さんが原爆で亡くなられたのはお気の毒だつた。それはアメリカが原爆を落したからだよ。それは君にも分かるだろう」

研は今井が何を言つてゐるか一瞬分からなかつた。

「君のお父さんとお母さんは米帝の侵略戦争で殺されたんだよ」

「でも、ソ連や中国が原爆を落しても父や母は死んでいました」

「それは違う。米帝の原爆で死ぬのは侵略戦争の犠牲だけど、ソ連や中国の原爆で死ぬのは米帝からの解放の為の殉死だ。それは英雄的行為だ」

「でも、死は死です。ソ連や中国の原爆なら誰も死はないというのなら別ですが」

一座に笑い声が起つた。今度は今井が怒つた。といつても、もともと感情の起伏の乏しい顔だつた。左の眉がピクリと動いただけだった。しかし、そのわずかな動きは気に入らないものを悉く粉碎せずにおかない怒りが凝縮していた。

「君、ふざけるのはいい加減にし給え。世界は米帝と中ソがパワーゲームを繰り広げているんだよ。また戦争となつてみる。米帝によつて全世界が全滅してしまう。そうなる前に米帝との鬭争に勝利しなければならない。君のようセンチメンタルのことばかり言つていぢや始まらない。君はもつと学習して目覚めるべきだ」

研はもう我慢ならなかつた。

「僕はもう帰ります」

研は憤然と立ち上った。

「ところで君は今までこういう集会に出たことあるの？」

立ち上った研に今井が聞いた。研は返事の代わりに今井を睨みつけた。

「君は初めてだな。多分そうだと思ったよ。それで君をここに来るよう誘つたのは誰だい」

研はそれがどうしたとばかりに小林の名を言つた。

「道理で…。それで分かつた。それはご立派な、でもいろいろと問題のあるお方の紹介だね」

今井は口の端に冷笑を浮かべて吐き捨てるように言つた。

研は聞き捨てならなかつた。

「おい、あんたは一体何様なんだ」

今井と小林の間に何があるのかは分からなかつた。ただそれが小林への悪意の表情であるのは分かつた。研は小林が好きで尊敬していた。だからこの男の小林への侮辱が許せなかつた。これまでこの男が東大卒だと思つて敬語を使つていたが、ここに来ていつもの言葉遣いが戻つて來た。

「さつきから見ているとあんたは汗一つかいていない。一体あんたは汗をかいたことがあるのか。肉体労働をしたことがあるのか。あんた一回工場で働いてみろ」

それは、今井とは関係の無いことだつた。しかし、今井の何の感情も動いていないような表情を見ているとそう言いたくなつた。

今井の表情は元の無表情に戻つていた。研にはその仮面のような無表情が薄笑いよりもっと氣味が悪かつた。

「初めて集会に出た人間には時折り君のような人間がいる。まあ、これに懲りずに又出てきたまえ。回を重ねると

我々が正しいことが分かるさ」

今井は落ち着き払つて言つた。研は自分の言葉がこの男に届いていないのを感じた。

「ふん、もうこんなところに二度と来るもんか。お前みたいに身内に原爆で死んだ人間がいない人間が偉そうに言うな」

研はレジュメを机に叩きつけると部屋を飛び出した。

戸外はもうすっかり闇に閉ざされていた。凧ぎは止んだのか、川からは少し風が吹いてくる。しかし、その風は熱を含みかえつて暑さを感じさせた。

研は、川べりのバラック住宅の間を歩いて行つた。川べりは国有地で、この住宅群は不法住宅だつた。当局は占拠しているのが原爆で焼け出された住民なので長い間黙認していた。しかし町の美観上、特に防災や衛生の面からこのままにしておくわけにはいかない。最近になつてようやく再開発の計画が持ち上がつていた。

川風に混じつた悪臭が鼻をつく。住宅の隙間から洩れる排泄物の臭い、側の小溝を流れる汚水の臭い、周辺には住民達の生活の餓えた臭いが漂つっていた。研は鼻をつまんで歩いた。今日は二人も不愉快な人間に出会つてしまつた。北村と今井である。研は鼻をつまんだ指先に力を入れた。悪臭を嗅がないためであつたが、そうすることによつて、北村と今井を忘れてしまひたかった。

街灯もない暗く狭い道をしばらく歩くと、公園があつた。一帯は戦前、練兵場だつたあたりで、一角が公園として整備されていた。公園には木々が黒々と繁茂していた。その一隅にこうこうと灯りのこぼれる公民館があつた。集会を飛び出した研はその公民館に入つていつた。

公民館では小林達が明後日に上演される劇の稽古に余念がなかつた。市内の職場の演劇サークルの合同公演なの

で、演技者も裏方もすべて仕事を持つた人達だった。仕事が終わって集まるので稽古はどうしても夜になつた。

稽古場に入った研は部屋の隅に座つた。

板張りの広い部屋だった。開け放した窓から風が吹いてくる。周囲が公園であるだけに、風は木々の涼氣を含んで爽やかだつた。唸りを上げて扇風機も回つてゐるが、その扇風機の風よりも戸外から流れ込む空気の方が涼しかつた。

まもなく稽古が休みになつた。

「もう少しかかるよ」

小林が汗を拭きながら、部屋の隅に座つてゐる研に近付いてきた。小林はこの劇では日系一世の役で出演することになつてゐる。

「先に部屋に行つておいてくれるかい。鍵の置き場は知つているよね」

研は頷いた。鍵は玄関側の植木鉢の下にある。勝手知つた小林の部屋だつた。

「お腹は空いてないかい。冷蔵庫に食べるものがあるから食べておいても良いよ」
研のお腹はペコペコだつた。

「明後日には君の稽古もあるからね」

この劇には、研も群衆の一人で舞台に立つことになつていた。これも又小林に勧められたことだつた。もつともその役は台詞もなく黙つて立つてゐるだけなので、稽古も何もなかつた。公演前にこれらエキストラも含めて総合打ち合わせをすることになつっていた。



基町の児童公園
(昭和 37 年・広島市公文書館提供)

小林のアパートには歩いて行つた。公園の薄暗がりから本通に入るとまばゆい光が目に飛び込んでくる。多くの人が行き交つて、夜になつても人の往来は絶えることはなかつた。

パチンコ屋が他を圧して騒音を建ててゐる。その隣に予備校があつた。一階は事務所だつたが、二階からは上は教室だつた。煌々とした灯りの下での授業風景が見える。窓辺の生徒達が授業に聞き入つてゐる。研は彼等の真剣な表情を見上げながら自然に自分の気持が昂ぶつてくるのを感じた。

研は、玄関脇に立てかけてあるラックからパンフレットを取つた。大学受験を決めてから、研はこの予備校に入学することを考えていた。来年の夏には夜間コースに入學して受験に備えようと思つてゐた。入学に備えて研は貯金を始めていた。パンフレットを開いても真っ先に授業料の箇所に目が行く。その額は研がまだまだ貯金を続けなければならぬことを示していた。

本通から平和公園に入った。川べりのベンチで十人位の若者の一団が騒いでいた。服装はジーパンにシャツが多い。男は一様に髪が長かつた。その一人がギターを弾いてゐる。構わない服装のせいか、周りを気にしない騒ぎようのせいか、彼等は周囲に放逸な雰囲気をまき散らしていた。同時に他の市民達とは違う切り立つた殺氣のようなものも発散していた。

「あの人達、ゼンガクレン？」

側を母子連れが通る。幼稚園児のような男の子が彼等を指差して言つた。

「あんまり見ちゃ駄目よ。知らない顔して通り過ぎなきや」

母親は男の子を急がせた。

全学連の過激な行動がテレビや新聞で報道されている。研もその名は知つていた。ヘルメットをかぶり、手拭で

顔を覆い、石や棒で警官隊にぶつかっていく。研には彼等の主張は理解出来なかつたが、その素手で国家権力に立ち向かっていく行動にはどこか共感するものがあつた。しかし、実際に全学連の学生を見るのは初めてだつた。研は立ち止つて彼等を見ていた。

彼等がこの公園でなにをしているのか分からなかつた。不気味ではあつたが、呑気に騒いでいるところからみて、とてもテレビで見るような示威行為を仕出かす輩には見えなかつた。

彼等の中にひとり、目についた女があつた。すらりとしてスタイルが良かつた。やはり皆と同じようにジーパンにシャツ姿だつたが、他の皆が薄汚れた印象を与える中で彼女だけ垢抜けっていた。黒いジーパンも水色のシャツもものが良さそうで、髪は長かつたがよく手入れが行き届いていた。夜目にもわかる大きな目をしていた。

研がぼんやり女を見ていると、女が研を見てにこりと笑つた。女は臆する風もなく研に近付いてきた。

「君、地元の人？」

吃驚した研は頷いた。

「私達皆東京よ。で何歳なの？」

「十七歳」

「高校生？」

「うん、定時制高校だけど」

「私、大学よ。だつたら君より少し年上ね」

更に女は何か言おうとしたが、背後の仲間に呼ばれてそちらへ帰つていつた。

研は小躍りする思いだつた。東京のしかもとびきりの女が自分に声を掛けてくれたのである。研は仲間達が彼女のことを見ていたのをしつかり耳の奥にとどめた。

小林のアパートは平和公園を通り抜けた川べりにあつた。窓を開けると川風が吹き込んでくる。研は扇風機のスイッチを入れた。稽古場からアパートまで何百メートル位しか歩いていないのに汗まみれになつてゐる。工場の更衣室でシャワーを浴びてきたが、もう一回水でもかぶりたかった。

冷蔵庫の扉を開けると、サンドイッチがあつた。小林の作つたものだつた。自分の食べる分と研の食べる分を二つ並べて置いてある。研は自分の分のサンドイッチとコーラを持って窓際に座つた。コーラを呑みながら、小林の分を残してサンドイッチを食べた。

ここに出入りするようになつて、研は初めてサンドイッチを食べた。こんなにおいしい食べ物がこの世の中にあるのかと思った。それにコーラ。最初は石鹼の味がしたが、これを飲みながらサンドイッチを食べるとさらにおいしかつた。研はここで食べるものにはアメリカの味がすると思つた。勿論研はアメリカの味がどんなものか知らなかつたが。

アパートのどこかの部屋からテレビの音が聞こえる。アナウンサーの声とその声を追い掛けるように笑い声が起ころ。番組は『ジエスチャー』らしかつた。

食べ終わると研は英語の本ばかり並ぶ本棚をしばらく眺めていた。小林の机の上にはやはり英語の本が積んである。小林は夏休みの間に英語の本を二十冊は読破すると言つていた。今アメリカの小説を翻訳していく、積んである本はその小説の翻訳の為に必要な本だということだつた。

本棚の前に小林の愛用のギターが立てかけてある。小林はギターを弾くのが上手かつた。各職場の有志を集めて音楽サークルを作り時々小演奏会を催したりしていた。研はギターを抱えボロンと鳴らした。

今高校は夏休みだつた。従つて小林の仕事も休みだつた。研はこうして長い休みのとれる小林の職業が羨ましかつ

た。自分はと言えば夏休みでも工場で朝から晩まで汗まみれで働く。小林とは大違いである。

研も以前東大を卒業したら小林のような教師になるのも悪くないと思ったこともある。

『でも見た目ほど樂じやないぜ。休みといつたつて雑用が山のようにあるんだから』

小林はそう言訳をした。研も、東大を出て教師ではいかにも地味過ぎると思った。自分はもつと偉くなりたかった。そう思い直して教師志望はやめにした。

研の東大志望、それはいつから芽生えたのだろう。研は何としても今自分の置かれている環境を変えたかった。工場での重労働、眠気を我慢しながらの授業、そして何よりも貧しい生活、それらから抜け出したかった。それを一気に解決できるのは東大に入学することであると思われた。

また研は小林の影響を受けて、東大を卒業した後アメリカ留学をしたいと思っていた。小林はアメリカ生まれのアメリカ育ちの二世だった。『アメリカでは皆働きながら勉強をしているよ。学資の足しにするためだけどそれだけじゃない。自立心を養うためだ。僕も大学時代はアルバイトで学費を稼いた。だから君達の気持はよく分かる』と言い、『アメリカに留学するのは素晴らしいことだ』とも言つてくれた。

研はこの小林にだけは自分の東大志望を打ち明けていた。他の誰にも打ち明けていなかつた。小林は『若いうちに挑戦するのは良いことだ』と言つてくれた。

研がこうして小林のアパートに出入りするようになったのは学校での英語の課題がきっかけだった。それは自分の生活の一コマを英語の短文で書く課題だった。研は、『僕の青春は工場の歯車代わりに使われた』と書いた。もちろん全部英語では書けなかつたし、間違いだらけの文だった。しかし、その時から小林が自分に声を掛けてくれるようになつた。

研は小林が好きだつた。小林も研にやさしかつた。『夏休みは英語を個人的に指導してあげよう。僕のアパート

に来なさい』 そう言つてくれたのは小林の方からだつた。

小林の帰りを待つ間、研はバッグからテキストを取りだして、今晚の課題の予習を始めた。

『僕のいない時は、机を使つて良いよ』

小林にそう言われていた。自分の机を持つていらない研は、アパートではいつも折畳のちゃぶ台で勉強した。
『僕の一番聖なる時間は机に向かっている時だ。だから机だけは贅沢をしたんだ』

そう小林が言うように普通の二三倍はある広い机だつた。こうして小林の広い机に座るのは気持ち良かつた。勉強もはかどるような気がする。

しかし、テキストを読み始めると、途端に仕事の疲れが全身を襲つた。食欲が少しばかり満たされたせいもあつた。

小林が帰つた時、研は机に突つ伏して眠つていた。起こされて研は目を覚ました。

「僕も今夕食を食べたんだよ。あのサンドイッチはマスターで少し足りなかつたな。今度は上手く作るよ

『いえ、とても美味しかつたです』

研はお世辞ではなくそう言つた。

「疲れているんだろう。どうだい、勉強始められそうかい」

「はい、大丈夫です」

研は口の周りの涎を拭きながら椅子に腰かけなおした。

「僕が椅子に座るから君はその儘机を使つて良いよ」

小林はそう言いながら、折畳椅子を開いた。

テキストの小林に指示された今日の課題の章を研が読む。その後日本語に訳する。その都度、側の折畳椅子に座つた小林が研の発音を直し、誤った訳を正す。二人は、この夏休みで、このテキストを終える予定だつた。

勉強が終わると、二人は近所の銭湯に行つた。

「アメリカにはね、銭湯というものが無いんだ。日本の銭湯は一番。ああ天国、天国」

小林は首まで湯船に浸かりながら気持ち良さそうに言つた。

風呂から上がつた小林は部屋から持つてきた着替えのシャツを着た。シャツは丸首で、背中に「WE SHALL OVER COME」というロゴが入つている。

「丸首のシャツは日本では下着だけど、アメリカでは上着に着る。何でもベトナム反戦運動の学生達が着ているらしい」

小林は珍しそうに見ている研に言つた。

その後、川べりの屋台でラーメンを食べた。若い一人にはさつきのサンドイッチはおやつでしかない。本当の夕食はいつも近くの食堂やこの屋台で食べた。

川面から吹く風は今日一日の猛暑が嘘のような深夜の風だった。

小林はラーメンを食べながら、しきりに劇の、自分の役作りの仕上がり具合を話した。

「皆が日系二世の役はお前に適役だという。警察に通じた敵役だけど、僕は单なる敵役にしたくない。そういうふた行為に追い込まれてしまつた日系二世を表現したい。そんな人間は僕の周りにいっぱいいたからね」

小林は、大戦中日系人は砂漠の強制収容所に隔離されたこと、その中にはアメリカ人にこびへつらつた日系人もいたことを話した。戦後、その日系人は街頭で同じ日系人仲間から袋叩きにあつたことも話した。

「彼等も家族に少しでも食料を回して貰うためにそんなことをしたのさ。あながち責められたことではない」

小林は半分自分に言い聞かせるように話した。

研は、小林からアメリカの話を聞くのが好きだった。小林の話す話から、まだ見ぬアメリカへの憧憬が研の想像力を刺激した。

「でも今夜は演出の大槻にこつてり絞られた。おかげで役作りが腑に落ちた。もう大丈夫。これからはもう楽だ」屋台には他の客はいなかつた。手持無沙汰な親爺は、屋台から出て、川に向かつて長い欠伸をした。が直ぐに慌てて屋台に戻つて來た。手には入れ歯を持っている。口を大きく開けた時、入れ歯が外れたようだつた。親爺はその入れ歯をバケツの水で素早く洗い、又口にパクリと嵌めた。

「おじさん、おちおち欠伸も出来ないね」

小林が笑いながら言つた。

「全く困つたもので」

親爺は口をもぐもぐさせながらにこりともせずに言つた。

「ところで、今夜の集会どうだつた？」

小林は自分が出席を勧めた今井の小集会の感想を聞いた。研は今井とのやり取りをそのまま話した。

「それは明らかに彼の方がおかしいな。アメリカやイギリスの原爆はいけないが、中国やソ連の原爆は良い、そんな理屈はおかしい。自分達だけでそう考えるのは自由だけど、それを人に押し付けるのはおかしな話だ」

小林は首を捻りながら言つた。

「それはそうと先生は人民党員ですか？」

研は聞いた。人民党員なら今井の主張に賛成の筈だつた。しかし今の小林は今井を批判している。研は疑問を感じた。

「ううん、人民党員ではある。でも僕はその前に市民だ。そのことはちゃんと強調しておかなければならぬ。確かに市民運動が政党に近付くことも、政党が市民運動に近付くこともある。しかし、政党が市民運動を牛耳ろうとするとおかしくなる。今の人民党はそれを露骨にやり過ぎている。もつと市民運動は多様性に富んでいることを認めるべきだ。多分三千万人とも四千万人ともいわれる署名を集めた団体を傘下に収めたいのだろう。それは選挙の票に繋がるからね。でも原水爆禁止運動の原点は市民運動から生まれた。そこを間違えちゃいけない」

研は今井の能面のような表情を思い浮かべた。ゲップのように今井に対する反感が又甦つて来た。

「僕はあの今井という人は嫌いです」

「僕だって彼は苦手だよ」

研は小林の名前を持ち出した時の今井の反応、顔に浮かべた冷笑や皮肉たっぷりの口調を話した。それを聞いた小林の表情が急に変わった。屋台の裸電球の下でも小林の顔色が青ざめているのが分かつた。研は自分が何か変なことを喋つたのではないかと思った。いずれにしても、小林と今井はお互いそりが合わないのだけは分かつた。しかし小林は直ぐにもとの表情に戻つた。

「上演日の明後日は仕事を休めるの？」

「叔父には休むと言つてあります」

「そうだね。出来ればそうした方が良いね。君も出演するのだし、舞台設置などの裏方の方もあるからね。でも無理しなくて良いよ。皆、仕事をもつているから休みのとれる人ばかりじゃないし、そこはお互い様だから」

食べ終えた小林は鞄から薬を取り出して、コップの水で飲んだ。小林によると戦争中の砂漠の強制収容所で結核を罹患したと言う。だからいつも薬を肌身離さず持ち歩いていた。

「先生、大丈夫ですか？」

「有難う。今はまあまあ良い。でもこれは突然発作が襲つて来るからね。その時はパニックだよ」

小林は笑つた。

4

今井哲郎が、ホテルのドアを開けた時、父はロビーの椅子に座つて一心に本を読んでいた。本の世界に入り込むと、周囲の何の音も耳に入らない。哲郎は小さい頃から父のそんな姿をいつも見てきた。思春期の一時期そんな父がたまらなく嫌だつたことがある。

「お父さん、ケインズを読んでいるの？」

父の読んでいた本は、今朝駅のプラットホームで父の脇の下から落ちた文庫本だった。

「うん、そう、どんなものかと思つてね」

父はすこしうろたえながら答えた。

「経済学を専攻している者としてはやはり読んでおかなくちゃならない。それでまず入門編から始めようというわけだよ」

父は本を閉じながら言い訳をした。マルクス経済学者が他派の経済学の本を読んで悪いという方ははない。しかし、哲郎には最近の父が昔のような熱烈な人民党員でなくなつてているのを感じた。どこかで一定の距離を置こうとしているのではと思われた。

二人でホテルの近くの食堂に入った。戦後駅前につくられた闇市の一隅のゴミゴミした横町にある店だった。店内はもう夜も遅いのに混んでいた。店のテレビがニュースを流している。広島市の浜田市長が、『世界大会が揉めるよ

うであれば広島での開催は見合させて欲しい』と声明を発表していた。

「どう、ビールでも飲む」

酒好きの父が哲郎に聞いた。その方面はまつたくいけない口の哲郎は首を振った。

「じゃ、私だけ」

運ばれてきたビールを父はうますぎに飲んだ。

「お父さん、会議はどうだつた？」

「なにしろ国際会議は明日だからね。そのことを検討するためには常任委員が集まつた。集まつたのは全員じやないけどね。会議ではここまで混乱すると明日の国際会議の開催は無理であろうという結論に達した。しかし、君も知つての通り人民党は国際会議は打ち合わせ会だから絶対に世界大会前に開催すべきだとしてはいる。私もその通り開催を主張した。安田さんは明日は無理だろうけど、大会中どこかで国際会議を開催できるよう努めようと約束した。

そして私にこの意向を党に説明してくれるよう頼んだ。私からの党の返答を待つて、明日の朝もう一度集まつて最終的に開催かどうかを決めることになった

「で、党は何て？」

「その答は分かつてはいるだろう。党はそんな曖昧なことでは駄目だ。国際大会は予定通り世界大会前に開催せよとの一点張りだ。だから安田さんには駄目だつたと電話した」

哲郎は父の窮状を察した。人民党が父を広島に派遣したのは、安田との人間関係に期待して調整方を期待したからだつた。その父が安田と党の間で右往左往している。

「国際会議を開くとも言わないし、開かないとも言わない。安田さんらしい対応だね。でお父さんの本当のところは？」

「私はやはり開催すべきだと思う。開催しなければ、代表を派遣してくれた国々に対して失礼だ。そんなことは人間のことではない」

父はやはり人民党員の一人だった。党の決定には従順だった。しかし、それを何が何でも押し通すことが出来ない。これは政治に係わる人間としては大きな欠点だった。党は明らかに調停者に人選を誤ったのだ。

「私は明日の朝の会議で開催が決まらなかつたら、東京に帰ろうと思う。仕事が出来なかつたんだからそれは当然だろう」

「でもせっかく広島まで来たのだから世界大会には出席位したら」

「そうだな。でもそうするとしても党に旅費は返還するよ。後は自腹で広島に滞在するよ」

父は大会までまだ何日かあるのだから踏ん張つて自分なりに努力してみることが出来ない。最初の躊躇にしか過ぎないのかもしないことをことさら大げさに考えている。およそ政治に向いていない潔癖で纖細な父が哲郎は気の毒でならなかつた。しかし、哲郎はそれ以上のことは言えなかつた。党からは若手のエースとして期待される哲郎だった。が、自分の父には別だつた。肉親としての憐憫の方が優先した。

「僕にも党から指令が出たよ。明日から僕達も会議に顔を出すよ」「出席するの？ でも資格がないだろう？」

父は口の周りについたビールの泡をハンカチで拭きながら言つた。会議には常任理事しか出席できない筈だつた。「それこそ百も承知だよ。その上で会議に搖さぶりをかけるんだ」

店の中は相変わらず騒々しかつた。誰もニュースなど聞いている者はいなかつた。

「ところで、これが道子さんから預かつた手紙だ」

父は鞄から封筒を取り出した。途端に哲郎の胸が痛み始める。

「住所も電話番号も分からぬから連絡が付かない。私が広島に行くことを知つて預けてきたのだ。何しろ今の君には父の私だつて党を通きないと連絡が付かないのだから」

「あちこち転々としているからね」

哲郎の脳裏に多忙な毎日で思い出すことも無かつた息子の徹の顔が浮かんでくる。

「ビールでも飲みなさい」

哲郎の心中を察した父が再度勧めた。哲郎は素直に従つた。慣れないアルコールが苦かつた。それが過去を更に苦くするようだつた。

「酒は良いよ。私もお母さんが死んでからよく飲むようになつた。酒を飲まないと眠れないのだ。お母さんが生きていたらきっと叱られるね」

父は三年前、最愛の妻を亡くしていた。喧嘩一つしたことの無い仲の良い夫婦だつた。それから父の酒量は増えていた。

「どう、再出発しないかい」

父が哲郎の顔を覗き込みながら言う。

「再出発つて？」

「道子さんも君が定職についてくれさえすれば考え方直すと言つてくれているのだよ」

「でも、党の仕事があるから」

「党的仕事は続けるのさ。定職についてその上で党的活動をすれば良いじゃないか。もう世間は我々に昔のような期待を持つていない。だからそれはそれ、これはこれと割り切るのさ」

哲郎は答えなかつた。今度はビールを自分でコップに注いで飲んだ。

「君ももう三十歳を過ぎてしまつたし、それに…」

父は少し言い淀んだが、半分吐き出すように言つた。

「大学の教員の安い給料で徹の養育費を出し続けるのはしんどい、お恥ずかしいけどそんな私の事情もあるのだ」徹の養育費は父が出していた。臨時教員の道子の収入だけでは徹の養育は難しかつたからだ。父の本音を吐露され、哲郎は何も言つことが出来なかつた。飲めない酒を飲んだせいで急速に酔いが回つてくるのを感じた。

5

研が帰つた後、小林は床についた。眠りにおちるのを待ちながら布団の中で本を読んだ。今読んでいるのは、ジョン・オカダという在米の日系二世が書いた『ノー・ノー・ボーイ』という題名の小説だつた。

戦争中、アメリカの日系人は、アメリカ政府から、『アメリカ国籍をとるか』『戦場で日本人に銃を向けられるか』という二つの質問を突き付けられた。両方ともノーと答えた者は『ノー・ノー・ボーイ』と呼ばれ強制収容所ではなく刑務所に入れられた。

主人公もそのノー・ノー・ボーイの人だつた。物語は戦後になつて刑務所を出た主人公の行き場所を求めて彷徨する姿が描いてある。どこにぶつけたらいいのか分からぬ主人公の怒りを叩きつけるような文体で書いてある。小林は自分と主人公が二重写しなつてゐるようで引き込まれるように読んだ。

この本は、一九五七年に発表されてもう何年も経つが、日系人社会以外では話題にもなつていない。勿論、日本語にも翻訳されていなかつた。小林はこれを翻訳するのが日系人で同じ体験をした自分の使命だと思つた。それで夏休みに入ると暇を見ては翻訳に取り組んでいた。

小一時間ばかり読んだ頃にはもうすっかり真夜中になっていた。突然電話が鳴った。こんな時間に電話をしてくるのは弟のヘンリーに決まっていた。

「へイ、ボブ、明後日ジョンの誕生日だから僕の家に来ないか」

やはりヘンリーだった。ヘンリーはいつも小林をミドルネームで呼ぶ。

「駄目だ、公演があるから行けない」

小林もヘンリーの息子のジョンの誕生日は覚えていた。プレゼントもすでに送っている。

「そうだつたね。明後日だつたね。ボブにチケットも貰つてているよね。じやこうしよう。明日の晚こちらが広島に行くから一緒に食事しよう。広島でジョンの誕生祝をしよう。その晩はお婆ちゃんの家に泊まるよ」

「それなら演出の大槻に頼めば何とかしてもらえるだろう」

電話の向こうでは、妻のマリーやジョンの騒ぐ声が聞こえる。ヘンリーの家ではまだまだ賑やかな夜の真只中のようだつた。

小林とヘンリーとはロスで生まれた。父も母も広島出身の移民だった。父は庭師をしていた。その父の息子達には日本人としての教育を受けて欲しいとの希望で、小学生の小林は日本に帰国して広島市北部の郊外の祖母の家から国民学校に通つた。両親は弟のヘンリーにも同じことを望んだが、太平洋戦争が勃発すると日本への渡航が難しくなつた。従つてヘンリーはずつとアメリカの学校で教育を受けた。戦争が激しくなると小林は帰還船でロスに帰つた。戦争の中、父と母は家族一緒に運命を共にしたいと願つたのだ。戦争中は、一家は他の日系人と同様に収容所生活を強いられた。

戦後、小林とヘンリーはアメリカの大学を卒業した。卒業後、小林は日本に再び来て教師となつた。ヘンリーは

アメリカに残った。ヘンリーは里帰りの際見た日本の貧困・閉鎖性・封建性に生理的な嫌悪感を持っていた。アメリカに残ったヘンリーは軍隊に入り、今は岩国基地に勤務している。

小林は電話を切って床についた。耳には、ヘンリー一家の喧騒が鳴り続けていた。同じ日系二世でありながら、ずっとアメリカの学校で教育を受け、アメリカ女性と結婚したヘンリーは完全なアメリカ人だった。では小林はどうなのだろう。小林は日本の学校で学んだ経験を持ち、日本で就職している。そのせいいかどこかで日本人的なものを持つていた。ヘンリーがカリフォルニアの空のように陽気なら、小林は日本の秋空のような寂寥を湛えている。そうは言ひながら、ヘンリーはいまだに独身の兄を気遣つて事あるごとに自分の家に招待してくれる。二人は小さい時からとても仲の良い兄弟だった。

(続く)

あとがき

しおまち書房の久保様に助けて頂きながら出版に至りました。小さな小さな本です。今の願いはただただこの『魁』を続けていきたいと思っています。
（夫婦関係が破綻したときは別ですが…）

森昌之



表紙イラスト：シクラメン
今号収録の短歌にちなんで、
シクラメンのイラストを選びました。

広島文芸誌 魁～SAKIGAKE～ Vol.1

発行者：魁同人会

(年2回刊行予定)

2019年9月9日 初版第一刷発行

編集・ディレクション／久保浩志（しおまち書房）

DTP／石橋由香（Design ばんでぴえーる）

制作・発行／しおまち書房 <https://shiomachi.com/>

ISBN978-4-906985-23-4 C0090

©2019 Sakigake doujinkai Printed in Japan